

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4372700932		
法人名	社会福祉法人 成仁会		
事業所名	グループホーム みどり		
所在地	熊本県阿蘇郡西原村布田 845		
自己評価作成日	令和7年2月2日	評価結果市町村受理日	令和7年5月9日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/43/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなろ福祉サービス評価機構
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205
訪問調査日	令和7年3月4日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

広報誌「しあわせがいっぱい」は家族に好評である。 職員が入居者と楽しく生活する為の工夫と視点がある。喜びを共有することが出来る。 職員は常に笑顔で入居者とコミュニケーションがとれている。 法人内の情報共有もスムーズにでき、相互交流が出来ている。職員は役職、資格にとらわれず業務が出来、問題意識を持ち、意見を述べる事ができる。 入居者は退去後の不安感が解消できるように支援体制がある。 新規入居にあたっては、本人、家族と信頼関係が早期に出来るよう対応している。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

令和6年度は医療的な問題に対して、医療機関との連携強化による夜勤者の不安軽減や病状悪化に対する対応を取り決めケア統一を図る等高齢化する入居者の支援に努めている。その中でも行事に出かけることを旨として小学校へ卒業祝いの贈呈に出かけたり、ドライブや地域資源を活用しながら多くの外出を支援している。特に誕生日には入居者の希望に応え担当職員との一日を楽しむ等“ねばならない”という概念を取り払い、メリハリのある生活を支援している。季節毎には行事食として新米に感謝して炊きたてのおにぎりやだご汁会等入居者と職員が一緒になって作る希望食に、家庭的な温かさと思いやりの溢れた環境であることが表われている。職員の変動も無く働きやすい環境にあり、馴染みの関係性の中で自由な生活やこれまでの地域の中での生活の支援は、職員が自然体での対応と根拠のあるケアの実践と言え、入居者同士の中睦まじい様子や、掃除や縫い物等これまで培ってきた関係を継続させるホームである。
--

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当するものに○印		項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と
			2. 利用者の2/3くらいの				2. 家族の2/3くらいと
			3. 利用者の1/3くらいの				3. 家族の1/3くらいと
			4. ほとんど掴んでいない				4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように
			2. 数日に1回程度ある				2. 数日に1回程度
			3. たまにある				3. たまに
			4. ほとんどない				4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 少しずつ増えている
			3. 利用者の1/3くらいが				3. あまり増えていない
			4. ほとんどいない				4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 職員の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 職員の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 家族等の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 家族等の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が				
			2. 利用者の2/3くらいが				
			3. 利用者の1/3くらいが				
			4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価		
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
I.理念に基づく運営						
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	法人の運営理念、経営理念、考え方を共有しホーム内のケアにとどまらず、地域への貢献、信頼されるホーム作りを目指し、ガラス張りの運営を目標に実践している。	今年度は理念の研修会を開催し、アンケートにより職員の思いを収集し、その思いを理念に生かすべく検討している。今年度は医療との連携強化及び夜勤者の不安軽減の一環として病状悪化に対する対応を取り決めている。職員体制に変化も無く、理念として掲げる“家庭的な雰囲気”の中で、入居者の伸びやかな生活支援に、職員の工夫(外出やホーム内でのアクティビティ等)が随所に表われたホームである。		
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域の情報は把握するように努めているが、コロナ禍にて地域イベント等の参加も減り、現在は交流が少ない状態である。	コロナ感染症が5類となり、外の行事に出かけるよう努めている。隣接の特養との交流や例年提供される小学生が作る餅米のお返しに卒業式の記念品贈呈に出かける等小学校との相互交流に取り組んでいる。近くにある企業の運動会の見学に出かける等、地域の中での生活は充実してきたものの、コロナ禍前のような交流までには至っていないのが現状としている。	コロナ感染症対策が緩和され、従来の地域の行事等の再始動やボランティアの受入れ等検討される事で、地域の中で生活が更に充実するものと大いに期待したい。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	現在はコロナ禍にて、村内、小中学校の職場体験の受け入れや、家族会ができておらず機会は減っている。毎月発行の新聞等で、情報を発信している。			

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	参加者も増えており、意見や感想などを聞くことでサービス向上への気づきを得ている。	2ヶ月毎に開催する運営推進会議は、利用状況やヒヤリハット・事故報告、研修計画・報告や活動等資料をもとにして説明した意見交換により、今後のケアに繋げるとしているが地域のニーズもまだでていないとのことである。運営推進会議の見直しの時期として捉え、法人として運営推進会議にしていく意向である。参加の無い家族には議事録を郵送している。	運営推進会議のメンバー構成は充実しているが、家族や行政の参加は難しいようである。行政との連携として参加を促す事で、行政の動向等もリサーチが出来るのではないかとと思われる。更に、参加者を増やす方法として参加者に日程を図ってみること等検討いただきたい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議への参加依頼、村内行事への参加を行い、協力関係が築けるようにしている。 又、西原村地域包括支援センター運営協議会へ委員として参加している。	法人として村の福祉計画委員としての参画や、西原村地域包括支援センター運営協議会の委員としての参加ほ他、介護保険更新の申請に出向きながら情報交換を行なう等協力関係を築いている。地域包括支援センターからは運営推進会議に毎回参加を得て情報を発信している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	ホームでの玄関施錠は行っておらず自由に入出りできる環境である。又、月に1回の管理者会議にて各事業所での身体拘束についての報告、情報共有を行っている。 又、ホーム内で年2回の身体拘束についての勉強会も実施出来ている。	特養と合同での管理者会議での話し合いや身体拘束等適正化委員会を開催し、各部署からの報告等をもとに検討するとともにラインワークスでの研修により共通認識を持って拘束及び虐待防止の実践に取り組んでいる。職員は“〇をしなければならないという概念を取り払い、入居者が自由な環境の中でのびのびとした生活を支援している。車椅子も移動手段として捉え、転倒危険性のある入居者には、家族への説明と同意を得てプランに組み入れ、人感センサーを使用している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	併設特養と一体となり管理職の会議において情報を共有しチェックしている。また、内部牽制により、お互い注意し合える職場風土作りに努めている。ニュース等で取り上げられた事例で関連するものにおいては全職員に情報を発信している。 年2回の勉強会も実施出来ている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	特養と一体となり管理職の会議において情報を共有し、また、ニュースで取り上げられた事例に関するものは全職員に情報を発信できるようにしている。年2回の勉強会も実施している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居前の説明はもちろんの事、退居にあたっては、不安がないよう十分な説明と今後の対応について説明するようにしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	日々の生活の中で、ご利用者の意見を取り入れ、要望にも気付けるよう努めている。ご家族には面会時やケアプラン説明時、運営推進会議時などに意見を尋ねる様になっている。	職員は日々の関わりの中で入居者の要望等を収集している。家族にはケアプランの説明を対面として意見等を聞き取りしている。運営推進会議への参加時や、家族会も設置されており、家族会費の使い方として入居者へのプレゼントの贈呈等に繋げている。開設当初から長年継続して発行する“しあわせがいっぱい”での情報発信は家族から好評をえている。更に訪問時の写真を残し入居者個々のアルバムを作成している。	家族の訪問の多いホームであり、再度、意見箱や意見や要望等が記入できるような用紙を設置してみることも等検討頂きたい。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	常に意見を出しやすい環境である。意見や提案が上がりやすい様日頃よりコミュニケーションをとっている。月1回、勉強会の場を作り、管理者参加のもと、各スタッフが意見を出しやすいよう雰囲気作りに努めている。	ホーム長は1日に3回の職員の交代時間にホームに入り、職員とのコミュニケーションを図っている。毎月の職員会議や勉強会の中で職員との意見交換を行うとともに法人の運営に関わる内容等を共有している。長く勤務する職員も多く、職員が意見を出す機会が多く、行事での企画等に職員の提案が生かされる等風通しの良い関係が築かれている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	法人全体に人事評価があり本人と上司が評価する仕組みがある。残業を減らし有給取得に努めている。資格取得に対する補助仕組みがある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	事業所内の勉強会の他、法人全体で勉強会、研修を実施。法人内ではラインワークスを活用し研修動画などを配布している。リモートでの外部研修についても参加を心掛けている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナ禍により以前のような勉強会や交流を図る機会は減っているが、リモートでの研修などにはなるべく参加を促しサービスの質の向上に繋げている。管理者は「地域密着型サービス連絡会」での参加を通じ、他事業所との交流、情報交換の場を設けている。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	本人の意見や思いを聞きだせるよう努めている。又、初期ケアプランにも反映できるようにしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居に至るまでに行う面接の中で家族の意見も十分参考にしている。アセスメント作成には家族にも手伝って頂き必要なものは初期プランにも反映出来るようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	可能な限り、管理者と計画作成担当者が一緒に面談を行い現状の確認とその時の一番必要な支援を提案出来るようにしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	家庭的な雰囲気の中で、共に暮らし支えあう関係を心がけ、人生の先輩として接している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	ご家族面会時に本人同席のもと近況報告を行い、時には今後の予定などについても提案し双方の意見をきかせていただけるよう努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	ご利用者の要望に沿って定期的に故郷へのドライブを実施している。また、併設でのデイサービス利用者に近所の方、知り合いの方がいる場合は交流が出来るよう情報を共有している。	入居者の生活圏である村の中へのドライブや、神社参拝、週に1回デイ利用者と会えるのを生きがいとした入居者（近所でのお茶飲み友達）、正月の外出や誕生日に備え美容室に出かける等馴染みの関係性を家族の協力も得ながら支援している。縫い物や掃除機掛け等これまでやってきた事も継続させている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者同士の場の雰囲気作りには努めているが、全て職員が介入するのではなく入居者にできる力があれば、利用者同士の支えあいを見守ることもある。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用（契約）が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	併設の特養に異動された場合ケアプランを含めた情報の提供を行っている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日頃の言動や暮らしぶりから本人の意向や希望を把握し、必要であればケアカンファレンス、ケアプランを活用し支援するようになっている。誕生日には本人の望む1日が過ごせるよう希望を聞き誕生日祝いを行っている。	入居者は良く話をされる方が多く、入居者同士で会話ができる事で元気になられたり、こだわりのある入居者自分にして欲しいことは直接職員に依頼される等具体的に自分の思いを伝えられており、職員は本人の思いにより寄り添っている。今年度からは入居者と担当職員との話し合いにより誕生日はその人の為に一日を過ごす等“したい”とする思いを実現させている。	

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居の際は本人や家族、施設担当者から情報を得るようにし、アセスメント用紙を活用することでより深い情報を把握することができるよう努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	個人の有する能力等の現状はアセスメントを使って把握するようにし、ケアカンファレンスや申し送りノートを活用し、職員間の相互理解に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	毎月のスタッフミーティング、三ヶ月に一回のモニタリングを行い、スタッフ間での意見を出し合って、より良い支援に繋がるよう取り組んでいる。ケア内容に変更や検討案があれば本人へ提案し、家族へ連絡、意見を聞く様にしている。	入居者の日々の様子を観察し、ホーム長も参加される毎月のカンファレンスにより意見を出し合い、3ヶ月毎のモニタリングにより継続の有無を見極めている。入居者本人の意向や家族の思い等を具体的にプランに組み入れている。入居者の健康管理ができるよう短期目標を立て、職員及び主治医・看護師等との情報を共有し、SPO2低下時の対応や受診調整等をプラン化する等入居者個々の心身の状況等を介護計画書とし、家族との対面により意向等を聞き取りしている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ケース記録や申し送りノート、ケアカンファレンスの活用により情報の共有に努めている。また、モニタリング、ミーティングを活用している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	ケース記録や申し送りノート、ケアカンファレンスの活用により情報の共有に努めている。また、モニタリング、ミーティングを活用している。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	法人内の人的、物的、環境面の資源については広く活用、協働できている。現状の地域、社会資源のみでなく、新しく、資源の掘り起こしをしていくことが課題である。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人や家族の希望等、必要性があれば以前からのかかりつけ医の受診を支援している。又、協力医療機関との連絡を密にし、適時、適切な医療を受けられるよう支援している。	母体医療機関をかかりつけ医とし全入居者が訪問診療による支援を受け、歯科についても週1回母体からの訪問診療とする。精神科についてはオンライン及び3ヶ月毎の訪問診療とする他、皮膚科等専門分野の受診は家族も同行される等必要性や病状により柔軟に対応している。職員は日々バイタルチェックや日々の関わりから異変を見極め、ホーム長の指示を仰ぐようにしている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	定期的に行われる回診時には現状を伝え法人内の看護師と連携できるようにしている。特変時等は早急に報告し受診の有無の指示を受けている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時はサマリーを使用し、本人の認知面や行動状況について申し送りを徹底している。入院中も状態把握の為に連絡を多く取り、本人の不安を減らすと共に、病院のスタッフと関係作りができるように努めている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入所時健診の際、主治医となる医師より重度化した場合や終末期の在り方についての説明があり、その後カンファレンスの際に本人、家族に対し急変時の延命処置、看取りについても聞き取りをおこなっている。エンディングノートを使用した本人への聞き取りも実施している。	入居時担当になる主治医より家族に重度化した場合や終末期について説明が行なわれ、カンファレンスでその時点での意向を把握している。エンディングノートにはADLやその方の状況、人となりを記入し、入居者の思いを聞き取りしている。ADLの低下に伴い家族との話し合い等安全面の観点から検討し、住み替えも出来る事で家族も安心して預ける事ができると信頼を持たれている。全職員がホームでの支援のあり方について確認の為、研修を受けており、家族及び職員双方の安心に繋げている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時のマニュアルを作成し、特養との連携で急変時に備えている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	地域での防災訓練等には参加出来ないが防火管理者を配置し、火災や災害時の避難経路などの確保と、防火点検、隣接特養と合同で年2回の防火訓練とスタッフが自主的に行う防火訓練を行っている。	隣接する特養施設と合同により火災を想定して行ない、台風時にシミュレーションした手順書をそのまま訓練に生かして実施している。いした、入居者も実際に職員と共に避難し、ホームでは炊き出しも行なっている。法人厨房に備蓄しているが、厨房が使えなくなった場合を想定し、取引業者等をBCPに入れて対応する事としている。法人として福祉避難所として地域に唯一ある介護施設の役割を発揮する隣接の特養へ避難をする体制としている。	ホームを含む法人周辺は防災マップでも特に心配な点はないようである。法人が避難所としての役割を担っており、地域との総合訓練等に取り組まれていることが期待される。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	プライバシー保護の為、排泄時、入浴時など一人ずつケアを行っている。又、声掛けも耳元で行うよう心がけている。	年間研修計画に沿い、プライバシー保護やコンプライアンス等の研修を実施している。ホーム長は来訪者への対応や、入居者が不安感無く、落ち着いて安心して生活ができていることや居場所が作られたことに、職員と入居者との近い関係が表われているとしている。就寝前と起床後はパジャマや本人の好みの衣類等へ着替え、めりはりのある生活や馴染みの方言での話しかけにも尊厳や入居者を尊重する姿が表われている。	

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	何を行うにも、必ず本人へ声掛け、返答を得てから介入をするよう心掛けている。行事食などの企画時には、利用者の希望する料理と一緒に作り、飲み物も希望に応じて数種類用意し選択できるようにしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	入居者になにか希望がある時は、話を聞いて都度対応を行っている。スタッフは業務優先にならぬよう心がけている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	御家族に協力頂き本人の好みの服を準備して頂いる。ご本人で選んだり、職員で似合いそうな服を選び着て頂いている。本人の希望があれば散髪も馴染みの床屋へお願いしパーマをかける方もおられる。白髪染めも希望に応じて実施している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	得意だった料理や昔ながらの調理方法を日常会話の中で聞き出し、行事企画し一緒に準備やおやつ作りを行っている。また、下膳やお盆、テーブル拭きなど積極的に行われる方がおり、いつも感謝や礼を述べる様にしている。	ホームでは炊飯と汁物を準備し、副食は母体法人の料理として、常食やきざみ食を中心に入居者が和気藹々として食事時間を楽しまれている。台所には割烹着が準備されており、手際よく食器洗いや他の入居者の分まで下膳される等自発的な関わりが確認された。季節の行事(盆正月の料理・たこやき・自家製ゴーヤの佃煮等)や入居者の希望メニューの日を設け食材購入から下ごしらえ、調理まで職員と協力しながら取り組み、秋には庭でサンマを焼き、新米に感謝して炊きたてのおにぎりやだご汁等満喫されている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	管理栄養士と協働し、本人の状態に合わせて水分量不足気味なときは、チェックをし必要分摂取していただいている。又、本人の嗜好を大切に、お祝いや行事のメニューに聞き取りをし、取り入れている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、口腔ケア、義歯洗浄を行い口腔清潔に努めている。可能な限り自力にて行っている。舌磨きも行っている。必要時、歯科と連携している。定期的な歯科往診も行っており、必要時にはすぐに歯科と連携が取れるようにしている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	本人の排泄パターンに合わせ、本人にあった方法で支援している。極力、普通の下着を使ってもらっているようにしている。	職員が小声で促すこともあるが、自身でトイレに向かわれており、近くで順番待ちをされる入居者の姿も見られる。日中は全員が布下着で過ごされ、シルバーカーに排泄用品(尿取りパット)を準備し、トイレの際自身で交換される等自立した入居者が多いホームである。夜間にはリハビリパンツに変えたり、ポータブルトイレの利用等個別に対応している。退院後は特に入居者が一日も早くもとの生活リズムを取り戻し、排泄がスムーズに行くように支援している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	年齢と共に排便コントロールが難しくなってきた。個々に応じ施設の散歩や体操を行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	グループホームでは、一人ひとりがいつでも入浴できるよう、体制を整えている。個々の気持ちを優先し、くつろいだ気分で入浴して頂いている。季節によってイベント浴も行っている。	入浴は毎日準備し、体調に問題が無ければ毎日支援している。午後からを入浴時間として入居者にたずねながら対応しており、夕食後の入浴の希望にも対応している。浴槽にマットを敷いて高さを調節し、気持ちよく入って貰うようにしており、職員が持参した菖蒲や柚子を使って季節の筋目を楽しむよう支援している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	睡眠の際は清潔な寝具を使っただけで定期的に洗濯、交換したものを使用。日中ソファなどを活用し、リラックスできる環境づくりを心がけている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	カルテに記入してある「くすりの説明書」をスタッフは必ず読んで内服薬を把握。一日分ずつセットし、毎食時、眠前と確認し、確実に内服行っている。セット時に目でわかるよう内服一覧表を作成し、与薬時にはスタッフ二人で読み上げ確認を行っている。内服に変更あれば記録し、申し送る。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	一人ひとりの意思を尊重、又、能力に合わせ、洗濯物たたみなどの役割を設け、ケアプランと連動していただいている。入所時に聞き取りを行い、本人の趣味の延長ができるよう支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	季節感を味わえる行事、ドライブは実施している。コロナ禍により、地域などのイベント参加は減ってしまったが、ホーム内での行事を増やし楽しんでいただけるよう工夫している。本人の希望があるときは一緒に買い物へ行くようにしている。	外出の機会は多く、周辺環境を活用して神社参拝や小・中学校訪問、季節毎の花見、近隣や庭の散歩等情報を収集しながら出かけている。また、職員は外出が難しい時期にはミニ運動会や食事会など一緒に楽しむことの出来る企画を提案して活動に繋げている。入居者との会話の中での行きたい応えと一緒にドライブに出かける等日頃から入居者と良く会話をして望みを実現させている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	個人の金銭所持が理想だが現状は難しく実践できていない。買い物等の際に支払いを一緒にすることなどで実感してもらっている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人の要望がある場合は、家族へ連絡を入れ、本人が家族と直接話を出来るよう支援している。LINEを使用したテレビ電話も活用し遠方の家族とも顔を見ながらの面会ができるように支援している。また、年賀の手紙をご利用者各々で言葉を手書きで添えて送っている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	常に環境整備に努め、清潔感のあるリビングになるよう工夫している。季節の花や道具を使い、季節感が出るようにしている。	共有空間は広く、必要によりテーブルの配置を変え、食事が済むとソファに移られる等入居者は自由な場所で過ごされている。日常の様子や外出時の写真等掲示の他、入居者も手伝った大作の壁面の作品は広報紙で発信している。食事前後には入居者の足が事前に台所に向かい、できる事を手伝われる等賑やかな一日である。入居者も玄関前の掃き掃除やリビングの掃除機掛け等に取り組まれる等清潔感のある住環境である。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共用空間には、間隔をあけてソファを設置し、気の合う仲間と思いたい場所できつろがれている。利用者間の関係の把握に努め、トラブルを未然に防げるようにしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	ご家族と相談の上で、本人の使い慣れた物を活かし、馴染みのある居心地の良い環境を心がけている。居室内にはご家族の写真や手紙、本人の若い頃の写真を掲示し、思い出を語れるような環境作りに取り組んでいる。 新規ご利用者には自宅に飾られていたものをご家族に協力をお願いし、持参をお願いしている。	入居前に見学をしてもらい安心してもらうと同時に共有スペースや居室への持込み品等を確認してもらう体制としている。新たな購入は不要として自宅で使用されている物の持参を依頼し、テレビや収納ボックス、帽子等の小物や写真が置かれ、日中使わないポータブルテレビはカバーを掛けている。テレビを持込みや色紙・写真等を飾り、居室の掃除をプランに組み入れる等自分の部屋として大切に管理されている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	一人ひとりの身体機能に合わせた福祉用具を活用し、危険防止に努め、自分の力を生かし動けるように支援している。ホーム内では本人と話をした上で、自室やトイレなどわかりやすいように掲示するようにしている。		